

人見保育所(函館市)の子どもたちが、福島町千軒地区での森林体験ワークキャンプで、推定樹齢200歳のブナの木にごあいさつ。

自然がはぐくむ心とからだ 再発見・子育ての森

いま、子どもをはぐくむ場として、「森」が注目を浴びています。
北欧生まれの「森のようちえん」。北海道発信で広まった「木育」。
森や樹木とふれあう経験が子どもたちの成長を促しています。

注目される

「森のようちえん」

近年、保育・幼児教育の分野で「森のようちえん」が目されています。子どもたちと保育者が毎日森で過ごす、自然の中の保育機関のことで、第二次世界大戦終結から数年後のデンマークで、子どもたちを自然の中で遊び遊ばせたいと考えた二人の母親が、自分の子どもを毎日森に連れて行ったのが始まりといわれています。子どもの五感を刺激し、成長を促す効果が注目され、「森のようちえん」はスウェーデンやドイツなど、森林に恵まれた国々で瞬く間に広まりました。

日本では10年ほど前からその理念を取り入れるところが



千軒地区でのニホンザリガニ観察は、子どもたちに人気ナンバー1の活動メニュー。

増え始めましたが、北欧のように森を園舎代わりにするのは難しかったため、現在、日本国内での「森のようちえん」は、森での自然体験活動を通して保育、乳児・幼児教育、子育てを総称する言葉となっています。

北海道生まれの「木育」
共通項は森での活動

日本で「森のようちえん」が広がり始めた平成16年、北海道で「木育」という概念が生まれました。北海道水産庁務部の発想で取り組みが始まり、今では、木や森との関わりから豊かな暮らしづくり・森づくりに貢献する市民を育成する生涯教育として、体験学習やワークショップ、講演会などさまざまな活動が行われ、多くの人たちが木や森とふれあい、木工を楽しみ、森林の役割や木材の性質などの理解を深めています。

「木育」の対象は子どもからお年寄りまでのあらゆる年齢層で、活動場所も森に限らず、「森のようちえん」とは異なります。しかし、森から刺

激をもらって、自ら学ぶ姿勢は通底しています。森に抱かれる安心感、森が与える好奇心。森に入ることではか得られない経験がそこにはあります。

北海道森と緑の会で行っている「木育」関連事業に参加され、「森のようちえん」活動に積極的な2つの施設の実例に、子育ての場としての森を再発見できることでしょう。

「仲間・自然・遊び」
重視の保育
地元と連携して
森でキャンプ

公益財団法人
鉄道弘済会 人見保育所

函館市の人見保育所は、「乳幼児の保育に大切なこと〜仲間と自然と遊び〜」をポリシーに、乳幼児期から手つかずの自然に触れる保育を実践しています。3歳ころから森や



花火、ホタル観察、友だちとのわくわくする時間。ワークキャンプは夜も楽しい活動がいっぱい。

海、山に親しみ、年長組になると年4回保護者から離れて、函館山や大沼国定公園など自然の中で2泊3日のキャンプをします。

森での豊かな体験が
その後の人生の活力に

なかでも、限界集落である福島町千軒地区で行うワークキャンプは今年度が10回目。年々受け入れ地域との連携を強め、地元のお年寄りは子どもたちの来訪を心待ちにしているといいます。訪れる子どもたちのほうも、年上の子から経験談を聞いて期待を膨らませており、お別れのときにはみんなが涙を流すほど。帰宅後、たくましさを増した子どもに保護者は驚き、聞き取りアンケートには感動と感謝の言葉が並ぶそうです。

千軒でのワークキャンプを始めてから、思想を同じくする「森のようちえん」への関心が



「森の教室」で育てたミズナラの苗を「ひとみっこの森」に植樹。

視察後は、本場のやり方を取り入れ、ドングリや小枝を利用して遊んだり、木の感触を楽しめるおもちゃを増やしました。また、北海道森と緑の会の「森の教室」に参加して、2年間育てたミズナラの苗を七飯町の国有林に植樹し、「ひとみっこの森」の看板を掲

げました。

昨年、創立60周年を迎え、50代の卒園児もいる同保育所。佐々木所長は活動を振り返り語ります。「森林体験を始めたころの子どもたちは、大きくなっても森の体験を話してくれず。その思い出の中には必ず「縮だった仲間や教えてくれた大人がいます。木や森に関する百人百様のエピソードは、生きる上での活力になっているようです」。

16万坪の
原生の森を所有
自然の中で子ども自らが
気づきと学び

学校法人北広島竜谷学園
広島幼稚園

北広島市の広島幼稚園は、全国でも数えるほどしかない自園の森を所有する幼稚園です。11年前に取得した分を含め、現在の森は16万坪もの広さ。

「南部の里やかましの森」と名付け、園児だけでなく家族みんなで森の体験を共有し世代を超えて会話を楽しむことで、子どものコミュニケーション力や想像力を伸ばす場としています。

当初、森での保育については書籍やインターネットで情報収集しましたが、なかなか納得のいく答えが見つからず、平成21年に職員ら9名でドイツで「森のようちえん」を視察しました。

草薙恵真園長が最も注目したのは、「教師はいつも見守る姿勢を崩さず、どんな状況でも子どもに話しかけるときはささやくほどの小声だったこと」。常に子どものペースで歩き、道草しても決してせかさず、先生がにこにこしながら先に行つて待つていることにも驚いたといいます。「先生は自分でも考える力を育てていると感じました」。

森の刺激で自ら動く
子どもの自主を尊重

同園では森での保育を「森育」と呼んでいます。視察後はこの「森育」に「生きる力

を育む」というテーマを設け、森の中にいるときは、園舎の時と違う教師のあり方に頭を切り替え、体験して学ぶことを大切にし見守る保育を重視しよう決めました。

「それまではイベント的な内容を毎回考え、大人が遊びの主導権を握っていました。今は子どもたちがしたい遊びをしていきます。以来、子どもたち自らの新しい発見や森の不思議への気づきが増えました」と草薙園長。子どもたちは、倒れて道をふさぐ老木からもイメージを膨らませ、見立て遊びへと発展させます。人の手がほぼ入っていない原生林ならではの刺激です。

昨年行つた「森の教室」で初めて行つたドングリの種まきは、森をよく知る子どもたちに遊びとして浸透。木の実を見つけるたび土に埋めるといいます。「森の教室を機に、教室の中に木の話題が増えました。植えたドングリの成長を子どもたちと見守っていきたいと思います」と草薙園長はほほ笑みます。



探検は子どもたちが大好きな遊びのひとつ。自然発生したグループで、隊長役と隊員役が笹をかきわけ斜面を登っていきます。必ず大人は付きますが、子どもたちがやり遂げるまで見守ります。



仲間と相談して、せっかく見つけた虫を元に戻すことも。さまざまな経験を通じて森の約束事を学びます。



荒れた天気の日翌日は、見慣れた森が新しい遊び場に変身。今日のおもちゃは道で見つけた長い枝。